

(「利用者の声」) 京都大学の歴史を語る資料群とその保存

京都大学大学院教授 高橋 康夫

筆者は工学研究科の建築学専攻に属し、日本都市史・建築史を専門としている。エンジニアリングのなかの歴史学ということで、一見めずらしく思われるかもしれないが、日本の工学部建築学科ではごくふつうのことといっていよい。都市史・建築史の研究者は、日常的な研究活動においては、いわゆる文系、とくに歴史の分野の人たちの行動とほとんどかわりない。建築の図書室はもちろん、文学部など他学部の図書室、そして附属図書館を利用することも少なくない。さいわいなことに、研究の進展とともに必要となるさまざまな史料や文献の多くが学内に所蔵されており、ほとんどの場合にただちに参照したい資料を手にすることができる。最近、17世紀から19世紀にかけて出版された中国の書籍などを利用するようになってきているが、めずらしい貴重な書籍さえ、あたりまえのように文学部や人文科学研究科の図書室には備えられている。京都大学においては、このような状況は、もちろん歴史の分野に限ったことではなく、ほとんどの分野でトップレベルの蔵書を誇っているのである。これはまことに「有り難い」ことである。

筆者の所属する建築の図書室にも、およそ10万冊の蔵書がある。学科レベルの図書室としては多い方ではなかろうか。蔵書のなかにはきわめて貴重な外国雑誌や江戸時代以前の和書、古文書などもあり、学内はもとより、学外からの利用も絶えることはない。

蔵書およそ10万冊のなかにはかなり多くの割合を占めているのは、私の研究分野、すなわち建築史学の分野であるらしい。建築史講座は大正11年(1922)の建築学科創設当初からある講座で、今にいたるまで関連分野の図書や資料を収集、購入し、研究環境の整備・充実を目指して

きた。建築史学は、建築学の一分野であると同時に、歴史学の一分野であるから、備えておきたい図書などはもちろん歴史学のそれと共通している。むしろやや広い領域、具体的にいうと、狭義の歴史学、美術史、人文地理学、哲学、庭園史の分野などにわたってそろえようとしている。

実験系の建築史講座は、非実験系の歴史分野と比べると、ある程度予算の余裕があり、したがって購入図書の数などは建築の図書室の方が多かったようである。そのため建築史研究室の教官や学生が利用する一方、文学部や農学部、旧教養部など他学部の歴史学、美術史、人文地理学、哲学、造園学、庭園史の分野の教官・学生などからの利用も少なからずあった。つまり工学部建築学科の図書室が、ささやかながらある意味で全学的な役割を果たしていたといってもよいのではないか。

ところで、工学研究科の桂キャンパスへの移転がすでに始まっている。電気系と化学系の各専攻はすでに桂キャンパスへ移り、建築学専攻は来年の夏ごろに移転することになっている。この数年、文系の人たちと雑談する折によく聞かれることは、建築はいつ桂キャンパスへ移るのか、また図書室はどうなるのかということである。質問の本意は、今までのように建築の図書室が手軽に利用できなくなり、不便になるということのようである。

工学研究科の各専攻の図書室も、それぞれに学内の共通する専門分野の図書室と学術専門雑誌の利用などにおいて、たがいに支えあっているであろうが、建築の図書室の場合、相互利用の度合いがより大きいように思われる。建築学専攻の桂キャンパス移転にともない、図書も桂へ移動する。キャンパス移転後も、当然のこ

とながら、他学部の分野の教官・学生などからの図書の利用要望は変わらないであろうし、また建築史分野の教官・学生も、これまでと同様に他部局の図書室や付属図書館を利用するにちがいない。おたがいに不便さを嘆くことになるが、吉田と桂にキャンパスが分かれているかぎり、この状況は永続的であり、恒常的である。したがって、どのようにすればともにこれまでと同じような便益を享受し、研究と教育を継続できるかが大切な課題となろう。関係者にとってきわめて切実なこうした課題がすでに検討されていればたいへんありがたいことである。

さて、京都大学が百年をこえる教育と研究のなかで収集してきた膨大な図書、貴重な資料は、ある意味で京都大学の「知」の歴史をあらわす「文化遺産」とみることができる。同じような「文化遺産」として、教育と研究のために購入され、あるいは創意工夫してつくられたさまざまな教育用機器・研究用実験機器・試作機器など、いわゆる科学史・技術史関係の資料が数多く残されている。さらに教育と研究の場そのものであった、歴史のある建築施設群も保存されている（京都大学が保存を定めた「歴史的建造物」、このうち数棟が国の登録文化財になっている）。これらの広い意味での資料群もまた、京都大学の「知」の歴史を物語る貴重な「文化遺産」なのであり、「歴史の記憶」そのものである。

図書資料については、とりわけ吉田キャンパスは質・量ともにまさに宝庫といって差し支えなく、適切に管理・運営されていると思われる。しかし、それ以外の資料群についてはかならずしも良好な状態とはいえないのではないかと。本学の「歴史的建造物」は、すべてが国の登録文化財になされるべきであろう。とくに事務局本館が形を変えて再生された今、旧土木工学教室本館や建築学教室本館を登録文化財にする手続きが急がれるべきではないか。百年の歴史をもちながら建築の重要文化財の一つもないという

ことは、京都大学としてある意味で恥ずべきことであると思われる。50年後あるいは100年後、建築の重要文化財があると誇れるように、いいかえると歴史と文化の香るキャンパスを形づくってきたと内外に自信をもっていえるようになるため、長期的な視野にたった配慮が必要である。

京都大学が抱えている大きな問題は、技術史関係の資料群の取り扱いである。長い歴史をもち、戦災や火災に遭わなかった京都大学には、技術史資料が多数残されていると思われる。しかしながらさまざまな事情から社会の期待するほどには残っていないのではないかと危惧される。工学部や理学部、農学部、総合人間学部などが現在、どのような技術史資料を所蔵しているかを再確認したうえで、また総合博物館のあまりにも貧弱にみえる技術史部門のありようの再検討もふくめて、あらためて京都大学における技術史資料の保存・活用の方策を考えてみてはいかがであろうか。

独自性をもつことが期待される今後の京都大学において、技術史資料を整理、保存、展示、公開することは、学部学生の技術史教育に対する有用性に加えて、大学として果たすべき社会的な役割、また社会からも果たすべきと思われるたいせつな役割の一つと考えられる。

京都大学のキャンパス、すなわち教職員・学生の生活空間そのものが、長く豊かな「知」の歴史と文化を物語るものになることを期待したい。
(たかはし やすお)

